

## あとがき

本書は、黒木勘藏先生の早稻田大學文學部國文科に於ける淨瑠璃史講義の稿本を、整理排印したものである。

稿本は三種類遺されてゐるが、昭和四年四月から五年十月に亘つて執筆された第三稿本が、最後のものでもあり、また最も推敲されてゐると考へるので、これを底本とした。而して、それを他の二稿本及び雄山閣版風俗史講座の『淨瑠璃史要』を以て對校し、一方、各種出版物へ發表された諸論考をも參照して、整理に萬全を期した。

但、稿本は義太夫劇の衰頹期に入らずして中絶してゐる。しかし、既刊の『近世演劇考説』及び『近松以後』、並びに青磁社近刊の『近世日本藝能記』等にをさめられてゐる諸考説が、その缺けるところを補つて十分であると信ずる。願くば右三書を參照りたい。但、通史としての便をおもひ、第二篇第二章第三節の並木宗輔の半ば以後（自五一六頁）を、編纂者に於て簡單

に補足することにした。補足に當つては、つとめて私見を加へることを避け、組織は稿本挿入の紙片にしるすところに順ひ、内容は該當する諸論考から抄出したものを以て根幹とした。

稿本は、講義草案にありがちな斷片的覺書と異り、既に整然たる文體をなしてゐる。ゆゑに、出來うるかぎり原文に即く方針をとり、例へば引用原典を意譯してある部分なども却つてそのままにした。が、それにしても十數年を経た稿本である。御在世ならば、この形のままで世に問ふことを、恐らくは潔しとされないうに違ひない。全く面目を一新されることであらう。さればといつて、本書が今日なほこの方面に於て十分なる價值を保有することには、何の變りもない。ただ、整理に際して、先生の既に定評ある堅實な學風を、いささかなりとも傷ふことなかりしやを懼れる。

五六年前、間民夫氏の在京當時、門下生間に淨瑠璃史公刊の議があつた。高野辰之博士の御意見で、先生の講筵に侍した者の筆記數種を整理し、それを高野博士の許に保管されてゐた自筆稿本と對校する豫定で事を運んだ。そこへ、最近、稿本が黒木家へかへつたので頓に機は熟し、あらためて、専ら自筆稿本によることにして、ここに本書の刊行を見たわけである。編纂には、主として稻垣達郎・旭壽山の兩名が當り、杉崎重遠・鷲見利久がこれを助けた。記して

その責任をあきらかにしておきたい。

刊行に當つて寄せられた諸賢の御厚意を銘記しなければならぬ。

五十嵐博士には、御多忙のところ序文を賜つた。高野博士からも頂ける筈であつたが、長いお患ひの故に飾ることが出来なかつたのは頗る残念である。挿入圖版に就いて、早大圖書館並びに坪内博士記念演劇博物館から便宜を與へて頂き、とりわけ郡司正勝氏には御厄介になつた。先生の愛嬢鈴木かよ子さんには原稿の淨寫等に激しい御苦勞をおかけした。また、角川源義氏には青磁社へ斡旋頂き、青磁社主米岡來福氏は採算を離れて出版を引受けられ、編集部の手葉治氏には直接種々御世話願つた。ここに、編纂者として深く感謝申し上げたい。

〔附記〕本書がまさに校了にならうとする五月三十日、かよさんが急逝されたといふ寢耳に水の悲報に接し、編纂者一同は愕然とした。せめて見本刷でもおめにかけたかつた。御靈前に供へ御冥福をお祈りしなければならなくなるとは何事であらうか。悲しみを以て附記する次第である。

昭和十八年五月五日

編　纂　者　識